

あなたのおすすめの子どものは?



- ◆ 先ほど会員の方から、「子どもにおくる 戦争があったころの話」と「子どもにおくる本 沖縄は戦場だった」という二冊の本を紹介していただきました。自分たちの戦争体験の話子どもたちに何とか伝えたいという思いで出された本だと思いますが、私も子育て中は例えば「おこりじぞう」とか、「ひろしまのピカ」とか、そういう絵本を買って、子どもに読み聞かせしました。21 才になる末娘に「子どもの時に読んだ本で何が印象に残っている?」と聞いたら、「**からすのパンやさん**」「**ごちゃまぜカメレオン**」「**おばけのてんぷら**」の 3 冊をあげました。家は、小学校高学年になるまで、子どもたちと川の字になって寝ていて、毎晩本を読まされていました。自分も子どもの本を呼んでいと幸せな気持ちになるのですが、何しろ眠くて眠くて。
- ◆ 私が子どもの頃は、「小公女」とか「小公子」とか「イワンの馬鹿」などを読んで育ったのですが、今子どもが学校の図書館で借りてきて夢中になっているのは、「**パンツマンたんじょうのひみつ**」なんです。中を見ると、面白おかしい本で、それはそれでいいとは思いますが、私としては「名作は読まないの?」と思ってしまいます。
- ◆ 家の娘はリンドグレーンの「**長くつしたのピッピ**」にとても好きで、3 冊読みました。それから「**やかまし村**」を読んで、今「**やねの上のカールソン**」を読んでいます。この本の主人公は小太りで背中にプロペラがついているおじさん、格好悪いんだけど本人は自分のこと格好いいと思っていて、ずるいおじさんなんです。娘はこれが一番好きと言っていました。2 年生の女の子ですが、毎晩私が読んでやっています。
- ◆ 私も子どもに戦争を扱った本に触れてほしいと思って用意してあるんですが、戦争の本に限らず、悲しい本には太刀打ちできないという年齢なのか、例えば犬が死にそうになると「そこから先は読まないで」と、「**ナマリ**の兵隊」も「読まないでくれ」と言われてしまうんです。そういうことに立ち向かえるようになるまで、まだ時間がかかるのかと思って、そういう本はとってあります。



学校の読書環境がとても心配です

- ◆ 小学校に入ったら、小学校の図書室で大丈夫だと思っていました。でも小学校に入ったら、マンガばかり借りてくるんですね。家で硬い本を読ませたから、その反動なのかと思っていました。でも、今読み聞かせのボランティアで学校へ行ったら、学校の図書室はそういう本ばかりなんです。面白おかしい、イラストや絵の多い本ばかりで、昔からのオーソドックスな地味な本は埋もれてしまって、子どもたちは手に取りません。今、学校では読書活動を盛んに取り組んでいるはずなのですが、本を何冊読んだということばかり問題にしているみたいなんです。子どもたちが何冊読んだか、その冊数を統計出して、学年ごとにまとめたり、学校ごとにまとめたり…。他の市の司書さんに聞いたのですが、「パートだから子どもが読んだ本の冊数が少ないと切られてしまう」と言うん

ですね。だから、子どもたちが手に取りやすい本をどうしても入れてしまうと。学校の読書環境がとても心配です。

- ◆ 内容よりも冊数を競わせていることが多いので、保育園の時のように、先生方がいい本を選んで、懇々と読んでくれた安心できる時代は終わってしまったのだと思います。
- ◆ 地域の家庭文庫をしているお宅に伺っても、2000年代の貸し出しがほとんどないみたいです。だいたい小学生がやってこない。小学校に上がる前の子どもたちばかり。子どもが育つ時、その時に会える世界ってあると思うので、そういうのどう結び付けていけばいいのかわからない。
- ◆ 学校の図書館で、子どもたちの活字離れを食い止めるための秘策かもしれないのですが、10冊読むとしおりをくれるんですね。子どもはそのしおり欲しさに、読んでもないのに読んだ本として名前を書くんですね。読書の楽しみより先に、ものに釣られてしまう。本について深めるといような指導があればいいのだが、それはない。
- ◆ 学校からのアンケート調査の自由記述のところ、「毎年本を購入するお金はみんなのお金だし、子どもにとって本は残る財産になるから、もう少し買う本を考えてください」と書いて出しました。だって、ノンタンを全シリーズそろえたり、ディズニーの本をそろえたり、まるで量販店の本屋さんの店頭のような状態。いい図書館があって、力のあ司書の人がいれば、学校の図書館を考える基盤のあるような自治体と、そんなことを全然考えていない自治体の様子が、学校図書館にもろに出てきていると思う。そこは親が気づいていくしかないと思う。
- ◆ 学校の図書室に漫画があってもいいけど、それだけでは困る。「NARUTO」や「ONE PIECE」などの漫画やゲームの攻略本が入ってすぐの目立つところに置いてある。とにかく今は、読んだら冊数稼ぎ。
- ◆ 龍ヶ崎市は司書が全校配置されています。中には一生懸命やっている人もいますが、質はバラバラです。
- ◆ 松戸市では、市内の小中学校10校から11校を受け持つ6人の図書整理員が、学期に4日間、年間で12日間巡回して、図書の整理などを行っています。

2006年9月松戸市議会での答弁より

『学校巡回図書館司書の派遣により、児童生徒にとって利用やすく、図書が整備され、掲示物の工夫や室内装飾によって読書する場にふさわしい環境づくりがなされており、また、破損した本の補修、コンピュータによる蔵書管理の入力処理補助などの事務的なことでなく、経験、知識を生かして購入すべき新刊本のアドバイスや最近では、小学校の児童が本に親しむことができるように行われている読み聞かせの補助なども行っています。』

『司書教諭につきましては、配置が義務づけられた12学級以上の小中学校にすべて配置されており、学校巡回図書館司書と連携、協力をして子供たちの読書活動の充実 に努めているところであります。』

子どもが読みたいと思う本は、親として「えー？こんな本を」と思っても、受け入れる

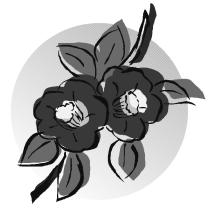
- ◆ 子どもと一緒に本屋さんで本を選ぶとき、子どもが選ぶ本と親が選ぶ本との間には昔からギャップがあったのではないのでしょうか。「ひろしまのピカ」や「おこりじぞう」については、大人になった娘にいまだに言われます。「お母さんはあの本を読んでほしい」と思って、読んでくれたんだろうが、怖くて怖くて夜夢にまで見る感じだった。怖いイ

メージしか残っていない」と。でも、私は戦争は怖いんだと思ってほしかったんですね。どのくらいの年齢になったら受け止められるのかということはわかりません。でも親が読んでほしい本は、ある程度は押し付けてもいいのではないかと思う。その一方で、本を読むことが楽しいと感じてほしいから、子どもが読みたいと思う本は、親として「えー？こんな本を」と思っても、受け入れる。

- ◆ 小学校の高学年になっても、本を読んでとせがまれました。そんな時に持ってきたのは、リンドグレーンの「やかまし村」シリーズや、「ドリトル先生」のシリーズ（ヒュー・ロフティング／岩波書店）。一番本を読まなかったのは中学時代ですね。せっかく小さい時から毎日のように読み聞かせしてきたのに、このまま本と縁のない生活を送る人間になってしまうのかと思っていたら、20才を過ぎて働くようになって、本をたくさん読むようになりました。その中で、私が読んで、今の娘たちに「この本、おもしろいよ」と言ってすすめたら、全員がはまったというのが、あさのあつこさんの「バッテリー」です。主人公は中学生なので、中学生・高校生は夢中になって読むのではないかな。
- ◆ 親から見るとくだらないと思うような本を選んでいても、年齢を重ねるにつれて、ちゃんと本に囲まれた環境の中で育っていくと、きちんと年齢にあったものを選んでいくようになる。でもその環境が整っていないと無理かもしれない。小学校5年生の時、娘は「ハリー・ポッター」を借りてきて、結局全巻読みました。映画も見に行っただけど、「本の方がおもしろい」と言っていました。それをきっかけにして、文字が多い本を読むようになりました。中学生で、部活が忙しいので本を読む暇がなかなかないのですが、今、携帯小説を読んでいますね。友だちの中でも話題になっているようです。文字に触れるというのが最初で、そこからいろいろ自分で見る目が育っていくのではないかな。

効果を求めて読書させるのはおかしい

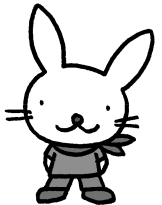
効果を求めるから冊数を競わせることになる。



- ◆ 子どもたちの家庭環境はそれぞれ違う。家庭で良質の本に囲まれている子どもばかりではない。全く本のない家庭もあるはず。そこに公立の図書館の役割がある。
- ◆ 今、学校に読み聞かせに行くと、すごい食いついてくる子と途中で飽きてしまう子と、はっきりわかってしまいます。詩だどどの子も一生懸命聞いたり、参加したりできるので、本質的には子どもは本が好きなんだと思います。佐藤さとるさんの「大きな木がほしい」という本があって、木に自分の家を作って、秋になったらこんなことしたいとかあんなことしたいとか、そういうことを想像しながらお話しする本なのですが、ちょっと長いので、途中で挫折してしまう子が多いんです。だから短くて、わかりやすい話を選ばないようにしなくては…。小学生になると、本を読んでいる子とそうでない子とでは反応が違ってきます。
- ◆ 15分座っているのがつらい子もいますからね。短いお話から入っていけばいいんです。5分間でも集中できればいい。つくられた時間は子どもはあまり好きではない。自分が好きな時に読むのが読書。朝の読書の時間って、効果があるのかな。
- ◆ 以前、文科省のホームページを見ていたら、「しつけと学力の相関関係を調べる」というどこかの高校で実施した報告書が出ていました。何をするのか見ていたら、遅刻対策として朝の読書をするんですよ。「校門にはりつかせる先生を増やすために、フロアー

ごとに読書を監視する教員を減らす。」という言葉が書いてあって、読書を監視するという言葉遣いにビックリしました。

- ◆ 全国学力テストの結果分析の中で、「読書が好きな児童・生徒の方が、正答率が高い傾向が見られる」「家や図書館でふだん一日あたり 30 分以上読書をする児童の方が、正答率が高い傾向が見られる」という項目がありました。読書によって、国語力をあげるとか、どうも勉強に結び付けている。でも、本を読むという行為はそれで完結していいはず。副次的にそういう力がつくかもしれないけれど、もっと本を読むことだけ楽しんで、その世界に埋没するとか、自分でない何者かになって想像するとか、そういう世界だと思う。効果を求めて読書させるのはおかしい。効果を求めるから冊数を競わせることになる。
- ◆ 親も本を読むことで何かを学び取ってほしいとつい思ってしまう。戦争を伝える本を読むのも、読書というより、大人から子どもへ伝える平和教育としてきちっと取り組むべきもので、本を読む楽しさとは別の問題として考えなくてはいけないのだと思う。
- ◆ うちの子どもが通った保育園では、「かわいそうなぞう」（土家由岐雄／金の星社）や「猫は生きている」（早乙女勝元／理論社）を読んでくれたのですが、それを先生が読みながら泣いてしまったそうです。先生たちはその本を読むことに力を入れていたので、親たちにもその本の購入を勧めるプリントも出してくれました。そういうふうに種まきをしてもらっておくということはとても大事だと思います。
- ◆ 「お手玉いくつ」（長崎源之助／教育画劇）、疎開に行った時にお母さんが持たせてくれたお手玉の中の豆を少しずつ食べながら飢えをしのいでいたら、それを友だちが見つくてそのお豆を全部食べてしまった。その友だちを責めたら、その友だちはつらくなって勝手に脱走して親元へ帰って行って、空襲で亡くなってしまった。そういうお話なのですが、それを読んだ時にはもう一度読んでと娘に言われました。ものによっては受け止められる話もあるのですが、受け止めづらいものもある。その時々の様子を見ながらと思っています。



司書がいないと図書室も鍵がかかっている時間が多い

- ◆ 子どもに本を読みながら、親としてはだんだん「勉強してほしい」というような欲が出てくる。でもそういう欲とは関係なく、子どもにとって楽しい世界って自分にもあったなあと、子ども時代の楽しさを思い出しました。読書は、人生が楽しいなという時間が増えることだと思う。
- ◆ 以前勤め先の学校で図書の担当になったことがありました。その時に、各教科の先生に買ってほしい本を書類に書いて出してもらおうようにしました。自分の授業に参考にしたい本を書き出すことはできるのですが、この年齢の子どもに読ませたい本を選ぶことができなかつた。そういうことは勉強しないとわかってこないこと。そこまで目配せできる先生って、とても少ないと思う。先生だから本のことを知っているわけではない。
- ◆ だから司書の先生が必要。司書がいないと、先生が図書室の選書をしなくてはならない。
- ◆ 図書室の選書を担当する先生が本の知識がないと、出版社・書店へのお任せになってしまう。学校教育の中の図書教育が全く配慮されてない本が入ってしまうのではないか。

- ◆ 先日新聞に、熊本市と狛江市の例が出ていました。両方とも全校に図書館司書が配置されています。両者とも市の臨時職員ですが、毎日5時間の勤務。有資格者は6割程度。教育委員会が研修を行っている。熊本市は小学校80校、中学校37校。全部の司書を配置するのに、9000万円。やろうと思えば、松戸市だってできるはず。
- ◆ 専任の司書がいるだけで、ネットワークを作るなど、いろんな取り組みができる。
- ◆ 司書がいないと図書室も鍵がかかっている時間が多い。
- ◆ 学校図書館の本を買うように予算配分しても、他の用途でも使えるように地方交付金として出しているの、自治体によっては、学校図書館の本を買わないで、他の目的に使っている。せっかく予算措置されても、選書する力がなければ意味がなくなってしまう。親が市民として、納税者として、しっかりものを言っていかなければダメ。

松戸市議会9月議会で、次のことが明らかになっています。

- ・ 新たに平成19年度から新学校図書館図書整備計画として、5年間で1,000億円、毎年度約200億円を地方財政にすることが決まった。
- ・ 1,000億円のうち、400億円は蔵書を増やす費用に、残りの600億円は古い本を更新するための買い替えに当てられて、この5年間で、学校図書館図書標準の達成を目指すこととされている。
- ・ しかし、予算措置も地方交付税として措置されたものであり、一般財源化している。つまり他の予算に流用するもしないも、当局の裁量次第。

子どもが生きていく、育っていく流れが大事だという最低のラインを守ってほしい

- ◆ 去年初めて、学校の読み聞かせのボランティアに行ったのですが、最初に言われたのが、「私たちは学校にお邪魔させてもらって、本を読ませてもらっていることを忘れないようにしてください」と。ボランティアとして親が学校に来ることをこのようにとらえているのかということが良くわかりました。読み聞かせも教育の一環だという意識があまりないんですね。本を選ぶのも学校はボランティアに丸投げで、しかも、そのボランティアを牛耳っている一部の人が選んで、私のような新入りには本を選ぶ権利もないんです。上意下達が徹底している。それに、あの人たちが気にしているのは、どのクラスにも同じ本を読むこと。だから、季節感のあるものは選べないし、行事に応じてとか、その時の子どもの状況に応じてとか、本を選ぶことができない。
- ◆ 私はなるべく学校にある本を使いたいと思っているのですが、良い本がないんですね。ボランティアの資質によって、活動の中身・質がだいぶ違ってきます。
- ◆ 学校との連携ができなければただの使い走りになってしまう。なぜ、学校で本の読み聞かせをするのかというその意味をしっかりと吟味する必要がある。
- ◆ 人間の育っていく中で、年齢によって発達課題があると思う。乳幼児期は、親の肌のおいよ温度を感じ、それが徐々にはなれて学校に入ったら、「成長のステップを一段上がったんだよ」という線引きは大事だと思う。小学校の時は友だちとの関わり、遊びの中で育っていく。中学校に入ったら、自分の中に入って自分を見つめなおしたり、考えたり、そして高校に入ったら、バーっと自分の世界を展開させて、そして世の中に出て

行く。そういう流れが大事にされていないように思える。子どもが生きていく、育っていく流れが大事だという最低のラインを守ってほしい。もっと専門的なアプローチをしてほしい。

- ◆ 学校は先生と子どもとの関係が基礎。先生が子どもに本を読み聞かせるのが一番。先生に読んでもらうのが子どもの心には一番残ります。
- ◆ 教育というのは、そもそも人から人へ伝え合っていくもの。先生方は授業もそういう思いで取り組んでいるだろう。だからこそ本を読むのも、一番伝わっていく。担任の先生が、今の子どもたちの置かれている状況を一番把握しているのだから、その子どもたちが抱えているものに対して、語りかけたいものを適切に選んでいけるのも担任の先生。
- ◆ 本の魅力というのは、おもしろいということもあるけれど、非常に荒唐無稽なお話で想像力が広がったり、悩みを抱えている時に力をもらったり、行き詰まった時にちょっと気分を変えたり、自分以外の人間になりきれれる至福の時であったり、いろいろある。
- ◆ 先生と子どもたちとの関係を作る時の赤い糸になってくれないかなあと思う。
- ◆ 地域の間は、自分の生活する地域で、本を読むだけの関係ではない関係を地域の子もたちと結びながら、読み聞かせの活動をしてもらいたい。
- ◆ 子どもが気に入った本、最初はリンドグレーンの「ロッタちゃん」に出てくる豚のぬいぐるみを作って、クリスマスプレゼントにしました。それから毎年大好きになったものをつくりました。そうすると、親子のかけがえのない会話や時間が共有でき、更にそれを深めることができました。「ラチとライオン」のライオンも作りましたよ。
- ◆ 私は「たんだのたんけん」が好きです。これを読むと必ず子どもたちは探検ごっこをするんですよ。自分で地図を書いたり、ラップの芯で望遠鏡をつくったりして、近くの空地や斜面に探検に行きました。

紹介された本

- 「やねの上のカールソンとびまわる」(リンドグレーン/岩波書店)
- 「やかまし村の子どもたち」(リンドグレーン/岩波書店)
- 「ドリトル先生航海記」(ヒュー・ロフティング/岩波書店)
- 「名馬キャリコ」(バージニア・リー・バートン/岩波子どもの本)
- 「三匹のヤギのがらがらどん」(北欧民話/福音館書店)
- 「イエペさんぽにいく」(石亀泰郎/文化出版局)
- 「からすのパンやさん」(かこさとし/偕成社)
- 「たんだのたんけん」(中川李枝子/学研)
- 「もりのへなそうる」(わたなべしげお/福音館書店)
- 「ラチとライオン」(マレーク・ベロニカ/福音館書店)
- 「エルマーのぼうけん」(R・Sガネット/福音館書店)
- 「おばけのてんぷら」(せなけいこ/ポプラ社)
- 「かいじゅうたちのいるところ」(モーリス・センダック/富山房)
- 「ごちゃまぜカメレオン」(エリック・カール/ほるぷ出版)
- 「はらぺこあおむし」(エリック・カール/偕成社)
- 「おおきなきがほしい」(佐藤さとる/偕成社)



- 「自由ってなに？」（オスカー・ブルニフィエ／朝日出版社）
- 「バッテリー」（あさのあつこ／角川文庫）
- 「子どもにおくる 戦争があったころの話」（鈴木喜代春編／らくだ出版）
- 「子どもにおくる本 沖縄は戦場だった」（鈴木喜代春編／らくだ出版）
- 「おこりじぞう」（山口勇子／新日本出版社）
- 「ひろしまのピカ」（丸木俊／小峰書店）

参加者の感想

- 先輩のお母さん方のお話を聞く機会が持てたこと、とても楽しく、嬉しく思いました。“本”のことから、いろいろな話題、扉が開けていくことを改めて感じました。
- 皆さんの子育てのお話を聞くことで、親と子で本を読むことの大切さ、将来親子で共有できる財産となっていくことを実感できました。毎日、子どもの口ごたえや、学校の有様に悩んだり不安に思ったりするのですが、将来に楽しみがあるぞ…と、心にゆとりができました。それにしても、物のあふれる中、いい物を見分ける目を持つこと、大人としてとても大事な責任を感じました。